

第5学年社会科における地域の視点を取り入れた授業改善

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 梶原拓也

1. 研究の背景

市や県を中心とした地域を対象とする小学校社会科の学習は、主に第3、4学年で行われている。小学校学習指導要領解説社会編(2017)では、このような学年ごとの学習対象について、知識に関する目標で「理解する内容」が「系統的、段階的に示されている」と解説している(表1)。

(表1) 理解する内容

第3学年	自分たちの市を中心とした地域における地理的環境や人々の生活や諸活動、それらの移り変わり
第4学年	自分たちの県を中心とした地域における地理的環境や人々の生活や諸活動、伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働き
第5学年	我が国の国土に生活舞台を広げ、国土の地理的環境とそこで営まれている産業の様子、情報化に伴う産業や国民生活の変化

※下線は筆者

このため、主に自分たちの住む地域を学習対象としている小学校第3、4学年では、多くの場合、教科書とは別に市町村ごとあるいは都道府県ごとに作成される副読本が活用されている。それは、山梨県においても同様であり、研究実践校では社会科副読本『わたしたちの〇〇市』や郷土学習教材『ふるさと山梨』などが活用されている。

こうした副読本を活用した自分たちの地域を対象とした第3、4学年の学習は、第5学年では「系統的、段階的」に「理解する内容」が広がり、生活経験の届きにくい「我が国の国土」

の学習へとつながっていく。このようなカリキュラム編成は一般的に「同心円の拡大」といわれている。¹「同心円の拡大」は、グローバル化や情報化を受け、現行の小学校学習指導要領(2017)では、第3学年で「他地域や外国との関わり」が「内容の取扱い」に書かれるなど、一部においては依拠していないものの、社会集団への社会化・社会参画を促す意味において、再認識されるべき理論的枠組みとされている。

この「同心円の拡大」について、安藤(2005)は、「適切なカリキュラム原理」としながらも、現代における児童の環境の変化から、「繋げる」と「比べる」というカリキュラムの適切なバランスを保つ必要性を指摘している。安藤の指摘する「繋げる」とは、学年で指定した範囲から他へと拡大していくことであり、「比べる」は同レベルの事象に対して他と比較対照していくことである。安藤は、「繋げる」原理を適用するだけでは網羅的な暗記主義に陥りやすく、学んだ事柄が深まらず、他の学習に転移することもないため、「比べる」原理の必要性を述べている。そして、「郷土コミュニティ」までは直接経験を重視することを全学年に適用して「概念学習の基盤」とすることで比較対照が生きてくると指摘している。

しかし、実際の学校現場においては、「郷土コミュニティ」を「概念学習の基盤とする」学習は、第5学年以降の社会科ではほとんど実施されていないのが現状である。つまり、安藤の指

¹ 「同心円の拡大」については、全国社会科教育学会、日本社会科教育学会によって主に次のようにまとめられている。

「同心円の拡大」は、ヴァージニア・プランやカリフォルニア・プランにおいて採用され、日本の小学校

社会科カリキュラムの内、学年段階による内容の配列(シークエンス)を構成する最も基本的な理論的枠組み(フレームワーク)の一つである。60-70年代において盛んに批判されたが、生活科を合わせれば、現在もほぼ一貫して採用されている。

「比べる」概念学習の基盤としての地域を「比べる」対象とする学びの原理が、「全学年に適用」されてはいないといえるだろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「同心円の拡大」のカリキュラムを問い直し、「地域の視点」によって児童の興味関心を高めるとともに、「地域の視点」との比較によって学習内容の理解を深める授業改善を行うことである。

昨年度の研究では、「つながり」を、自分を取り巻く社会との結びつきに対する認識と捉え、社会形成への参画意識を表す言葉として位置づけた授業構想に取り組んだ。地域社会の一員としての自覚をもつことが、その土台になると捉え、児童が心理的に親しみを感じやすい学校周辺を「身近な地域」として設定し、地域の発展に貢献した人物を取り上げて教材化を試み、社会形成への参画意識の高まりを目指した。研究の結果、「地域社会の一員としての自覚をもつ」上で、地域教材の有用性が明らかになった。一方で、教材とした人物への関心が高まりすぎ、単元目標へのアプローチがスムーズに進まないという課題も明らかとなった。

今年度、第5学年の担任となり、年度当初にカリキュラムを再検討する中で、第5学年の社会科の学習対象が、「身近な地域」を対象としないために、生活経験から大きく離れ、児童の認知の枠組みでとらえきれない学びになっているのではないかという懸念をもった。そこで、「身近な地域」を教材として取り入れ、「比べる」原理を発揮する過程の導入が、有効な授業改善になるのではないかと考えた。また、昨年度の研究課題から、「身近な地域」への関心が高まりすぎて、「我が国の国土」についての学びから逸脱しないような指導上の留意点も明らかにすべきと考えた。

(1) 「地域の視点」の導入

安藤(2005)の「比べる」原理と関わり、小学校学習指導要領解説社会編(2017)では、次のような記述が見られる。

「社会的事象の見方・考え方は、「位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して(視点)、社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること(方法)」と考えられ、これらは、中学校社会科の各分野の学習に発展するものである。(下線筆者)

つまり、学習指導要領においても、「比べる」=比較は、学ぶための重要な技法の一つとされている。そこで、「身近な地域」における事例を第5学年の授業に導入し、教科書で扱われる内容と比較して考えることで、「我が国の国土」の事象をより深く理解しやすくできるのではないかと考えた。

本研究では、社会的事象を身近に引き寄せるための社会的事象、また、教科書で扱われる学習内容との比較がなされる身近な社会的事象を「地域の視点」と表し、教材化して授業内に位置づけることとした。そして「地域の視点」は、補助教材や具体例として、授業の導入・展開・まとめといった様々な場面において取り入れることとした。

(2) 生活経験と学習対象との「心理的距離」

山田(2016)は、地域を取り上げて学習することの意義について、第3学年を対象とした実践から検証し、①子どもの興味・関心を高める②直接体験により子どもの感覚を磨く③直接観察を通して、比較分析力を育てる④事象を支える人の営みに気づく目を育てるという4点を示している。この指摘は、中学年のみではなく、高学年においても適用されるものであろう。

しかし、「同心円の拡大」の原理によって編成される第5学年の社会科は、山田の言う「地域を取り上げて学習することの意義」の適用が難しく、学習対象に児童は、心理的な縁遠さや距離を感じやすいといえるだろう。

この心理的な縁遠さや距離について、本研究では「心理的距離」と表現し、児童の居住地や学校の所在地を中心に作られる空間において、営まれる生活経験から生まれる社会的事象への親しみの尺度と定義した。

つまり、「地域の視点」を導入することで、この「心理的距離」を縮小させ、学習対象についての児童の興味関心を高めるとともに、教科書

で扱われる「心理的距離」の遠い地域と「身近な地域」との比較による学びを取り入れることによって、授業内容についての理解を深めることができると考えた。

3. 第5学年社会科の課題

本研究を進めるにあたり、所属校教員に、第5学年における社会科の学習内容において、指導に難しさを感じる単元についてアンケートを行った(表2)。アンケートの結果、第5学年の学習内容では、貿易と運輸の単元及び水産業の単元において難しさを感じている教員が多いことがわかった。

(表2) 指導に難しさを感じる単元

単元名	回答数
日本の国土と世界の国々	3
国土の気候と地形の特色	5
自然条件と人々の暮らし	4
米づくりのさかんな地域	4
水産業のさかんな地域	9
これからの食料生産	2
自動車の生産にはげむ人々	4
日本の工業生産と貿易・運輸	10
日本の工業生産の今と未来	6
情報を伝える人々とわたしたち	1
暮らしと産業をかえる情報通信技術	4
自然災害とともに生きる	3
森林とともに生きる	5
環境とともに守る	3
ない	3

※8月末実施 回答者数21名(複数回答)「単元名」は、教育出版「小学社会5」に準じた。

その理由として、身近な内容ではないために実感をもたせたり、興味関心を引きつけたりすることの難しさや、適切な資料を入手する難しさなどが挙げられた。特に、「水産業のさかんな地域」の学習については、海に面していない山梨県に住む児童にとって、親しみをもつような生活経験が少ないことから、「心理的距離」が拡大しやすい単元であると考えられる。

そこで、単元「水産業のさかんな地域」を研究対象とし、「地域の視点」を積極的に児童に提示しながら、「心理的距離」の縮小について検証していくこととした。

4. 研究の方法

(1) 対象校

山梨県公立小学校(A市)

(2) 対象児童

第5学年児童

(3) 授業実践

水産業のさかんな地域

(「小学社会5」教育出版 P82~99)

(4) 教材について

漁業は大分類として海水面と内水面に分けられる。海水面漁業は、主に教科書で扱われる海で行われる漁業であり、内水面漁業は湖水や河川などで行われる漁業である。食料生産という面で、海水面における獲る漁業は日本の漁業の大部分を占めているが、近年話題となった「近大マグロ」や「ウナギの完全養殖」など、持続可能な漁業の観点から育てる漁業への関心は高まっている。一方、内水面漁業における獲る漁業は、減少の一途をたどっており、食料生産という面では、育てる漁業が中心である。

山梨県においては、獲る専業漁業者はいないが、養殖のサケ・マス類が生産量全国3位であり、「甲斐サーモン」「甲斐サーモンレッド」「富士の介」などのブランド化を進めている。また、民間企業による完全養殖のトラフグや稚魚を輸入してのバナメイエビなどの養殖も行われている。栽培漁業としては、河口湖漁業協同組合がワカサギの魚卵からの孵化に成功し、遊漁とともに出荷も行っている。

(5) 指導について

山梨県は内陸県でありながら、古くから海産物を求める傾向があり、中道往還や鎌倉往還で県内に海産物が運ばれ、消費されていた歴史がある。特産のアワビの煮貝や人口比すし店数1位であることは、その表れといわれる。一方で、淡水魚も生産・消費され、1919年に県内に移入されたワカサギは現在も富士五湖の名産となっている。

本単元では、日本の水産業について、水産物の種類や分布、生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用、生産量の変化などに着目して学習を進めた。教科書で扱われ

ているのは北海道と鹿児島県の海水面漁業であり、児童の生活経験から「心理的距離」が拡大するであろう地域について学習をしていくことになる。そのため、学習への興味関心がもてず、水産業の概要や水産業に関わる人々の工夫や努力、それらの人々の働きを捉え、表現することは、容易ではないと考える。ともすれば、それらの地域における自然条件や社会的事象の知識を暗記することに陥ってしまう。そこで、「地域の視点」を効果的に提示することで、興味関心を高め、比較によって教科書で扱われる学習内容の理解が深められるように進めた。

「地域の視点」を授業内でどのように扱うのかについては、〔場面〕と〔意図〕から次の通り整理した。

〔場面〕	導入 展開 まとめ
〔意図〕	i 社会的事象の見方・考え方として、学習 内容の理解を促す。(理) ii 話題提供として、学習内容への興味関心を高める。(関)

「心理的距離」が拡大するであろう項目について検討し、「地域の視点」によって、それを縮小させることで期待する児童への効果を整理した。また、「地域の視点」を用いた場面とその意図を単元計画に位置づけ、これらを、水産業の単元における授業改善として、次の通り整理した(表3)。

(表3) 「地域の視点」と期待される効果

「心理的距離」が拡大すると考えられる項目	場面-意図	時間	「心理的距離」を縮小させる上で期待する「地域の視点」	期待される児童へ効果
水産物	導-関	1時間目	山梨県は人口比あたりのすし店数が全国1位。	内陸県に住む私たちの食生活にも水産物は深く関わっている。
獲る漁業	① 展-関	2時間目	ワカサギが近くの湖で収穫されている。	海の漁業と同様に、身近な所にも獲る漁業がある。
	② 展-理	3時間目	ワカサギを獲るために習性を利用した定置網漁をしている。	さんま漁と同様の工夫や努力しており、身近にも水産業で働く人の姿がある。
流通	① 導-関	4時間目	ワカサギの出荷には漁業協同組合の働きがある。	漁獲量が少ないワカサギでも、さんま漁と同様に出荷には様々な人が関わっている。
	② 展-理	5時間目	ワカサギは生きたままや冷凍することで鮮度を	さんまと同様に、鮮度を保ったまま流通させるため、

			目	保ち、流通させている。	様々な人が関わっている。
育てる漁業	① 展-関	2時間目	給食でも出された富士の介が市内で育てられている。		海や湖だけでなく、身近な所でも育てる漁業がある。
	② 導-理	6時間目	豊かな地域の水を使い、富士の介やバナメイエビを育てている。		ぶりと同様に、地理的環境を活かし、安心安全で安定した出荷を目指している。
水産資源の課題	① ま-関	7時間目	バナメイエビの稚エビは輸入されている。		身近な水産業も海の漁業と同様に諸外国と無関係ではない。
	② 展-理	8時間目	富士の介を育てるためのエサは海で獲られた魚が原料である。		ぶりと同様に育てる漁業においても水産資源を守る努力が必要である。
持続可能な水産業	展-理	9時間目	ワカサギの稚魚の放流し資源を管理している。富士の介など水産物のブランド化して消費を増やそうとしている。		海産物と同様に、水産資源を管理し、多くの人に食べてもらい産業を守る取組が身近な所でもされている。

※場面は、導入：「導」、展開：「展」、まとめ：「ま」、意図は、
i 理解を促す：「理」、ii 関心を高める：「関」を表す。

(6) 単元計画

時	各時の主な内容	「地域の視点」
1	普段食べている水産物は日本や世界の各地から届けられていること。	すし店数
2	水産物の水あげ量や種類は、海流などの自然条件と関係があり、特に暖流と寒流がぶつかる場所は好漁場になること。水産業には獲る漁業と養殖業があること。	ワカサギ 富士の介
3	さんま漁の漁師たちは、経験を生かしながら、集魚灯、ソナーなどを活用して魚を効率的に獲るとともに、鮮度を保つ工夫をしていること。	ワカサギの 定置網漁
4	水産物が水あげされてから出荷されるまでには様々な仕事があり、鮮度や安全性を保とうとしていること。また、せりでは水産物の質や水あげ量によって値段が決まり、その売り上げの中から仕事にかかる費用にあてていること。	ワカサギの 出荷 漁業協同組合
5	さんまが産地から消費地に届くまでには、様々な人たちが交通機関のはたらきがあり、生産・流通・販売まで一貫して、鮮度を保つ工夫をしていること。	ワカサギの 流通
6	長島町では、ぶりが育ちやすい温暖な海、いけすの設置に適した入り江などの自然条件を生かした養殖業がさかんであること。養殖業は、計画的に魚を育てて出荷できること。	地域の湧水 を用いた育 てる漁業
7	日本の水産業が抱える課題として、漁獲量の変動や全体の生産量の減少、外国との関係、漁の制限などがあること。	バナメイエビ の稚エビ 輸入
8	水産資源の減少を防ぐために、世界の国々の間で、漁獲量の制限などについて話し合ったり、200海里水域の漁場制限を設けたりしていること。一方で、より多くの消費者に水産物を届けるため、輸出も進めていること。	富士の介の エサの原料
9	安定した水産業を続けるために、水産業に関わる人たちは海や水産資源を守りながら、様々な新しい取組をしていること。	ワカサギの 放流 富士の介の ブランド化
10	水産業に関わる人たちは、安全で質の高い水産物をより多くの消費者に届けるために、様々な工夫や努力を重ねてきたこと。水産資源の管理にも配慮して、安定した生産を続けたいと願っていること。	1～9時間 目までのふり 返り

5. 検証

検証として、「地域の視点」が「心理的距離」を縮小させ、児童の興味関心を高めるとともに、教科書で扱われる内容との比較を通して社会的事象をより深く捉えることができたかについて、授業の様子、ふり返りカード、アンケート調査の3点によって行った。

(1) 授業の様子

プロトコルを作成し、授業中に「地域の視点」を扱った場面を中心に児童の学びの様子をふり返りカードの記述内容とともに分析した。

①導入で関心を高めるために用いた場面（1時間目）

T	(ランキングを見せて) 今日からの学習に関わるあるランキングです。 山梨が1位なのは何でしょう？
C 1	ぶどう
C 2	2位は長野だからちがう
C 3	うどんのコシ
T	よく覚えているね。
C 2	2位は讃岐うどんだよ。
C 4	スモモ
C	(その他、水・観光客・伝統工芸の数・織物・すしの店)
T	答えは、(人口比すし店が1位を提示)
C	ええー！
T	人口一万人あたり、山梨は日本で1位なのです。 (この後、給食に出る水産物についての紹介し、産地についての調べ学習)

授業後のふり返りカードの記述内容

<ul style="list-style-type: none"> ・なんで海に面していない山梨県が1位なのか、海に面している土地が広い北海道がなんで1番でないのか不思議 ・山梨県は海なし県なのになぜお寿司屋さんが全国で一番多いのか、そして海のない県は他の県よりも出荷できなくて損していて不利になるのではないか ・山梨県には海がないのに寿司屋が多いということは一番輸送しているということなのだろうか。
--

単元の導入部としてクイズ形式で山梨県ではすし店が多いことを提示した。教師の問いかけに対して、児童は、前年度までの学習を思い起こし、山梨県が1位になっているものを探していた。海がない山梨県においてすし店数が1位であるという予想外の正解に驚きの声が上がった。ふり返りカードの記述内容からも、「地域の視点」として強く引きつけていたことがうかがえた。

②展開で理解を促すために用いた場面（9時間目）

T	(さくらえび漁の水産資源管理の取組について教科書で学習した後) もっと他にもいろいろな事例があるんだけど、
---	--

C 1	山梨はやっていないのかな？
T	やってるけど有名じゃない。
T	じゃあ、いったいどういうことをやっているのでしょうか？(ワカサギの稚魚放流に関する資料を配付)
T	何で、水産資源の管理が海より重要な？
C 2	海はいくらでもある
C 3	広い
T	うん、海は広いね。
C 1	湖は限りがある。
T	「限りがある」はわかりやすい言葉だね。ワカサギは獲る漁業で話をしてきたけど、実は獲るだけでなく放流もしているのだそうです。
C	へえーそうなんだ。 (この後、禁漁期間について話題が移る)

授業後のふり返りカードの記述内容

<ul style="list-style-type: none"> ・国内での安定した水産業にするための取組について、地域でもやっていてふやすために水産業を管理していた。 ・禁漁期間などを作り次の世代を残している。 ・漁師は稚魚を海や湖に戻して漁業を続けている。 ・ワカサギ漁もブリ漁もやっていることは、変わらないことがわかった。
--

地域で行われるワカサギ漁が採卵・孵化・放流をしていることを、持続可能な水産業の取組の事例として扱った。教科書で扱われている海のさくらえび漁と「地域の視点」としての湖のワカサギ漁を比較し、「限りがある」という言葉が引き出された。ふり返りカードの記述内容からも教科書の学習内容と比べて考えた様子が見えたと感じた。

③まとめで関心を高めるために用いた場面（8時間目）

	(北方領土や諸外国の漁の影響について学習した後)
T	これまで学習してきた地域で生産されている水産物は、外国との関係はあるのかな？
C	ない(多数)
T	ではバナメイエビ・・・
C 1	バナメイエビって名前から外国のものだよ。
T	そうだね、元は外国のエビでしょうね。バナメイエビは海水で育てるのです。水は、豊かな富士吉田の水を使っているのですが、塩はメキシコから、赤ちゃんエビはタイから輸入して富士吉田で育てているのだそうです。
C 2	え、なんで？
T	何でだろうね。けれど、富士吉田でしている漁業も決して外国と無関係ではないようですね。 (この後、次時に日本と諸外国の取組について学習することを伝え、ふり返りカード)

授業後のふり返りカードの記述内容

<ul style="list-style-type: none"> ・世界的な課題により減ってきている漁業だが改善していると考えている国もあるのか、また日本はどうかだろうか ・外国と吉田はつながりがある。

まとめの場面で、諸外国との関係について投げかけ、次時への興味関心を高める手だてとし

て「地域の視点」を取り入れた。地域の水産業も諸外国とのつながりがあることで、驚いている様子はあったが、本時の学習内容と比較対照となるような事例ではなかったため、混乱を招いてしまった。ふり返りカードでも、単元において学習してきたさんまが近年不漁であることの原因について言及する記述が多く見られ、「地域の視点」に関わるような記述はほとんどなかった。

(2) ふり返りカード

ふり返りカードは、記述量と内容の分析を行った。一人一台タブレットを活用し、各個人のアカウントにカードを配布し入力させる方法で行った。教師からのコメントは、気づきや考えの良さを評価したり、授業中の取組の様子などについて声かけをしたりした。また、授業で扱いきれない個人の疑問についてはリンクを添付して次時までコメントとともに、児童が自由に見ることができるようにした。(図1)

授業時間内に、ふり返りカードを入力する時間を同程度確保するように努めたが、授業進行や学校行事により、取組時間には多少の差ができることもあった。記入が終わらない児童やより多く記入したい児童については休み時間に取り組みよう指示した。なお、本実践開始時に

は、全児童が10分間に150字以上の入力ができるタイピング能力を有していた。



ふり返りカード記入の様子

授業が進むにつれて、記述量は増加傾向にあり、「地域の視点」に関しての記述は、単元のはじめと終わりに多く見られた(図2)。

「地域の視点」については、1時間目と9時間目での振り返りカードに具体的に言及する記述が多くあった一方で、2時間目～8時間目では具体的な記述は見られず、本時のまとめにかかわる記述が目立った。これは、「身近な地域」そのものを学習することを意図としていない本単元において、とりわけ課題追究課程である2時間目～8時間目において「地域の視点」が効果を発揮し、教科書の内容との比較対照として適切に働いたといえるだろう。

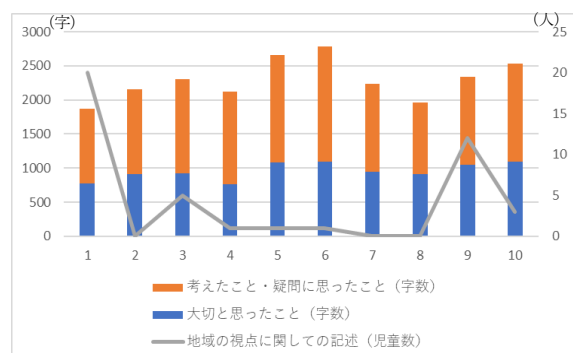
つまり、単元の導入においては、「地域の視点」を強く意識して興味関心が高まり、単元の中程においては「地域の視点」は比較対照として働

水産業 ふり返りカード

時間	大切と思ったこと など	考えたこと・疑問に思ったこと など	先生から
1	水産業は日本や世界各国で行われていてスーパーには色々な国の魚が売られている	山梨県は『海なし県』なのになぜお寿司屋さんが全国で一番多いのか。そして海のない国は他の国よりも輸出出来なくて損している不利になるのではないかな	海のない国は確かに水産物を手に入れにくいかもしれませんがね。しかし、授業でも話した通り「海」限定ではないのです。水産物は海以外にも獲れるはずですよ。当然海とは違いもあるでしょう。では、そういったところには水産物は届けられていないのでしょうか？
2	暖流は温かくて寒流は寒い。その間にある銚子は沢山の魚が取れる	魚を苦しめないで取ることも大切だと思う。私達の体に入るのだから感謝せねばならないと思う。編みで取るなどをして少しでも痛みを和らげてあげることも必要になる	魚を苦しめないで、というのは面白い視点ですね。なぜ苦しめない方がよいのでしょうか？わたしたちの「食」という視点で考えてみてはどうでしょうか？ 編み×網○
	漁は習性や経験を巧みに使っている	国には、漁の仕方によって、魚の獲りやすさや、漁具の大きさなどが異なる	「これは面白い！まさにわたし達の知らない漁の仕方だね。マツチ、漁にもいろいろあるよ。」
9	持続可能な水産業を目指している	僕は今エスティージーズの本を読んでいて17の目標の中に陸を守る、海を守るなどの目標を立てていました。エスティージーズと水産業は関係しているのかもしれない	SDGsのターゲットのうち、14に「海の豊かさをまもろう」というものがありますね。これだけでなく、2「飢餓をゼロに」なども関連します。SDGsは、社会・経済・環境の3つの視点から持続可能な社会を作っていくことを目標としています。ですから、今回の社会の学習は、深く関連しています。外務省のHPです。参考にしてみてください。
	今、世界は大変な危機に迫っていてその危機を乗り越える為に色々な工夫をしている。(例えばHPなどを通して宣伝をしている。)など	これから先世界で協力して課題が無くなったらどれだけ楽になるだろうかな	水産業だけではなく、世界全体の課題として、これからのあり方を考えることができましたね。この考え方は、非常に大切です。さて、では課題のない世界はあるのでしょうか？水産業で環境や資源を守りながら続けていくことで、別の場所で問題が発生するのではないかと、考えることも必要ということです。つまり、問題は一筋縄ではいかない。だから17もの目標がSDGsにはあるとも言えます。これから、物事を見ていく上で、ぜひ、自分の考えをしっかりと持ちながらも、いろいろな人の声を丁寧に聞き取って、考えたい力を鍛えていきましょうね。

(図1) ふり返りカードの実際

き、単元のまとめにおいては、単元で学習してきた内容と「地域の視点」とを関連させながら考えていることを示しているといえる。



(図2) ふり返しカードの記述量と内容

(3) アンケート調査

アンケート調査は、単元終了後に地域の教材を使いながら学習を進めたことについて、児童から自由記述で行った。

アンケート調査の結果、全ての児童が「地域の視点」を授業で扱いながら学習することについて肯定的に捉えていた。その理由として、「地域のことを知ることができた」(23人)「教科書と比べることがわかりやすかった」(18人)「学びたくなった」(13人)を挙げていた。

これらから、「地域の視点」で比較しながら学習を進めることは、学習内容が理解しやすくなるだけではなく、充実や楽しさを感じていることが明らかになった。同時に、地域そのものを知りたいという欲求も満たしたともいえよう。

一方、「地域の視点」について肯定的に捉えながらも内容については、「そこまでくわしくは別にいい」「難しかった」という意見もあった。

水産業では、地域の富士の介、ワカサギについても扱いながら学習を進めました。地域のことと一緒に学習することについて、どう感じましたか。自由に書いてください。

(回答 34名)

回答 (一部抜粋, 下線部筆者)

- ・地域のこと、水産業にも触れながらやっていたのでわかりやすかった。地域についても知れたからいいと思う。これからも地域に触れながらやってほしい。地域のことがよくわかり、もっと学びたいと思った。
- ・地域でもこんなことをやっているんだということがわかって学習がさらに楽しくなっていると思います。あと地域のやっていることが例みたいなのになって、さらに学習がわかりやすくなっています。もっと地域のこととつなげて学習すると、地域のこともわかっていいと思います。

- ・山梨県には海がないから、自分の住んでいる地域と比べて学習すると山梨県の工夫もわかるし、ぶりとか山梨県じゃない工夫もわかるからわかりやすい。
- ・地域のことと一緒に授業してくれると、私たちの近くにもあるんだとかわかりやすいと思います。でもそこまでくわしくは別にいいのではないのでしょうか。
- ・私は自分の地域のことを知れることは楽しいしワクワクします。そして自分の身近にいる人について知れることも嬉しいです。社会で自分の地域のことを知れることは楽しみの一つなので、私は地域のことを少しでも知れることは嬉しいです。
- ・自分の地域とほかの地域を比べて色々なことがわかるから楽しい。地域のことを学習していっぱい地域のことを覚えたら他の地域の人にも教えることができるからいいなと思った。
- ・地域のことについて触れながら学習するとわかりやすいし、地域のことについても知ることができるといいと思います。あと、もっと地域のブランドを知りたい、調べたいなどと思うことがあります。そういうのもあり学校に行きたくくなります。
- ・ワカサギや富士の介なども難しかったけど、感想をタブレットで打ってどんどんわかってきてとても嬉しかった。
- ・私は山梨に引っ越してきて社会の学習により富士の介とワカサギを初めて知ることができてよかったです。
- ・教科書には山梨県のことなかなか載っていないから、富士の介とワカサギについて学習できてよかったです。知らなかったこともよく知れたし、地域のことに触れて考えられてわかりやすかったです。なのでこれからも地域のことも一緒に学んで社会について考えていきたいです。
- ・自分の身の回りのことばかり考えていて、富士の介やワカサギなど地域のことをあまりよく知らなかったけど、地域のことも考えると自分の知らないことやあまりよくわかっていなかったことなどが知れるようになった。地域のことにも気にしていたら、自分たちが住んでいる所は他の地域などに比べて良いところや悪いところなどもたくさん学ぶことができ、自分の身の回りのことばかり考えないで、他のことも考える必要があると思った。
- ・地域のこともやって、わかりやすくていいと思う。特にワカサギのことをやったときは教科書みたいに養殖していることがわかりやすくて良かったと思う。これからも地域のことも交えてやりたいです。
- ・地域のことと他のところを比べて学習ができるからわかりやすい。
- ・海なし県の山梨でも富士の介とワカサギが育てられていることや、海がある県との育て方の違いやいろいろな違いがわかることがいいと思った。
- ・今回の学習で今まで知らなかった地域で水産業に関わる活動をしていることがわかった。水産業の生産を増やしていくために、地域の活動をしていくことが必要だと思った。
- ・私たちが知らない地域や知っている地域でいろいろな人たちが水産業に関わって、富士の介やワカサギなどを育てていると知って、水産業というものに興味をもてた。

私の知っている地域では、ほかにどのようなことをしているのかも調べてたりして学習したいと思った。

- ・一緒に考えると、今どういう状態になっているかなどがわかりやすいです。富士の介などの魚が減っているから、関わって大切にしていこうと思いました。
- ・地域の水産業について、こんなことをしているんだなあってわかりやすいし、教科書と一緒に学習していくことで教科書が言っていることが本当にやっているんだとわかるから、地域のことも一緒にした方がいいと思う。
- ・社会の教科書では、身近な地域ではなく、日本の県などを学習してきました。身近な地域の方が自分の知っている場所などがわかって、楽しいなと思います。自分の県だから興味をもてることができていいと思います。

6. 成果と課題

本研究の成果として、「地域の視点」を取り入れることで、学習対象と児童との「心理的距離」が縮小される効果が判明した。

このことは、児童へのアンケート調査の回答において「地域のやっていることが例みみたいなものになって、さらに学習がわかりやすくなっている」など、「地域の視点」が学習内容の理解を促していたことを表す記述が多数見られたことから明らかである。こうしたことから、「地域の視点」と教科書で扱われる地域との比較によって、教科書で扱われる内容への理解が、一層深まったと推察される。

また、「心理的距離」を縮小させる「地域の視点」は、「身近な地域」そのものへの興味関心を高めるだけでなく、教科書で扱われる内容との比較により、学習内容への興味関心を高めていた。それを高めたのは、単元の導入や授業の導入においては、身近な事例の意外性や驚きであり、展開においては教科書の内容との比較から得られた充実や楽しさであった。

一方、本研究による課題2点とその改善策を挙げる。1点目は、「地域の視点」を扱うことで、学習資料が増え、授業時間や時数を圧迫することである。学習内容を精選することによって、実践では対応したが、それでも授業全体の流れが速くなってしまった。授業で扱う資料や社会的事象について精査する必要がある。

2点目は、授業で求められる「地域の視点」に合致するような地域素材が必ずしもあるとは限らないことである。本研究では、「地域の視

点」を常に入れて授業を構成してきたが、8時間目の授業実践のように、「地域の視点」を入れたことで、学習内容の理解の妨げとなってしまった事例もあった。全てに「地域の視点」を取り入れるのではなく、「地域の視点」を適切に単元計画や教育課程へ位置づけていくことが求められるだろう。

本研究では、小学校第5学年の社会科における、「心理的距離」を縮小させる「地域の視点」について検討し、実践を行ってきた。今後も、地域を扱う学習を第3、4学年の社会科のみで行うのではなく、学習対象と児童の「心理的距離」が拡大する高学年においてこそ重要であるとの視点に立ち、授業改善に取り組んでいきたい。

7. 謝辞

本研究を進めるにあたり、取材にご協力頂き資料を提供して下さった河口湖漁業協同組合の皆さんに厚く御礼申し上げます。

8. 引用・参考文献

- ・安藤輝次(2005)「同心円の拡大に関する日米教科書の比較：小学校社会科カリキュラム研究(その1)」『奈良教育大学紀要』54,83-91 奈良教育大学
- ・教育出版(2019)『小学社会5』
- ・文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説 社会編』
- ・森分孝治,片上宗二(2000)『社会科重要用語300の基礎知識』159 明治図書
- ・日本社会科教育学会(2012)『新版 社会科教育事典』10-11 ぎょうせい
- ・山田均(2016)「社会科指導における地域の教材化—内面的なやる気の育成に視点を当てて—」『人間教育学研究』4,87-95 日本人間教育学会
- ・山梨県農政部(2021)『新やまなし水産振興計画』
- ・山根栄次(1982)「社会集団拡大法の論理—「同心円の拡大論」の再構成—」『社会科教育研究』48,29-40 日本社会科教育学会